

新しい生活様式のもとで
動き出す

文化・芸術の

創造と継承

新型コロナウイルス感染症の影響は、県内の文化・芸術活動にも及んでいます。多くの団体が、活動の制限や自粛を余儀なくされたほか、高校生の文化の祭典「岩手県高校総合文化祭」も、規模を縮小しての開催となりました。

県民の皆さんが、「新しい生活様式」の中で、どのように文化芸術活動に取り組んでいるのか、4つの事例を紹介します。

new

normal culture & art



合唱

不來方高校音楽部

マスクを着用しながらも伸びやかに力強い歌声を響かせているのは、不來方高校音楽部の皆さん。4月7月の公演が中止になるなど厳しい状況の中、「自分たちの手で後輩に残せるものを」と練習に打ち込む副部長の高橋宗さん

(3年)。自粛期間を経て、「歌への思いに改めて気付いた」と話すのは部長の三浦亜美さん(3年)。屋外で歌うなどの工夫を重ねながら、たくさんの人たちを笑顔にしたいという思いを込め、不來方ならではのハーモニーを重ねています。



演劇

いわてアートサポートセンター

「感染症対策をしていけば演劇の継続は可能と考えている。コロナ禍にあっても、文化の灯を絶やしてはならない」と語るのは、いわてアート

サポートセンターの坂田裕一さん(67)。県内でも多くの劇団が活動の休止や制限を余儀なくされる中、入場者数を減らすなどの対策をとり

ながら、朗読劇などを開催。また、来年に予定される震災10年目の舞台「岬のマヨイガ」の公演に向けて準備を重ねています。



「文化は人生の緩衝材。人の気持ちをやわらげ、開放し、憤りを吸収する効果がある」と坂田裕一さん

民俗芸能

岩泉高校郷土芸能同好会

岩泉町小本中野地区に伝わる「中野七頭舞」を継承する、岩泉高校の郷土芸能同好会。

披露を予定していた行事や祭りが次々中止になり、全体稽古も中断せざるを得ない中、仲間と演舞する日を目指して一人一人が自主練習に励んで

きました。4月半ばからは、全体稽古を再



開。地域を越えて郷土芸能の素晴らしさを広めるため、町内の皆さんの応援を励みに、伝統の舞を踊り続けています。



元村こどもさんさ愛好会

「さつこらちよいわやっせ!」のかけ声で表情きり。換気された室内で、元気に練習に励むのは、滝沢市元村地区の伝統さんさ愛好会の小中学生たち。「(中止になった)盛岡さんさ踊りも楽しみにしていたが、発表が全てではない。次になぐことも大事」と山生陸会長ら保護者が見守る中、次世代を担う子どもたちが地域の伝統を継承しています。



働く農民のエネルギーを表した中野七頭舞。「力強さとしなやかな舞いで、みなさんを元気づけたい」と、心の復興を目指す部長の片山裕哉さん(2年生)



みんなが文化芸術に親しみ

創造できる岩手へ

県は昨年度、「第3期岩手県文化芸術振興指針」を定めました。指針の基本目標は、「豊かな歴史や文化を受け継いで県民誰もが文化芸術に親しみ創造できる魅力あふれる岩手」の実現。県は、指針をもとにさまざまな団体と連携し、文化芸術に親しむ機会の提供や文化芸術を生かした地域づくりの推進、未来の文化芸術を担う人材の育成などを進めています。

また、表紙を飾っていただいた、さいとう・たかをさんをはじめ、本県にゆかりのある漫画家が多数いることから、漫画を活用した

県の魅力発信にも取り組んでいます。「いわてマンガプロジェクト」として単行本の発行などを行い、今年で10周年を迎えました。岩手を題材にした漫画が読める「コミックいわてWEB」もぜひチェックしてみてくださいね。



QRコードを読み取って簡単にアクセスできます

